

6. 南詔国後期の対外関係①

6.1. 吐蕃・唐朝と南詔国の三国関係

■吐蕃→南詔国

「贊普鍾」「日東王」の称号を与えるが、実際は属国扱い（人員・物資の徴発）
雲南西北部に直接進出、反蒙氏勢力（旧三浪詔など）も支配下に置く

■唐→南詔国

安史の乱後、雲南に直接進出する余裕はなし
ただし韋皋のもとで西川節度使は軍閥化、吐蕃に対抗する強力な軍事力となりうる

・韋皋→南詔国

対吐蕃戦の必要性から南詔国を優遇
連年の朝貢使節受けいれ / 高官子弟の成都留学

■南詔国→唐

唐の軍事力を借りて吐蕃に対抗 / 唐に忠誠を示すためにも戦果を挙げる必要
唐の冊封を受けることで蒙氏王権の裏付け（吐蕃との対抗上/国内の対立勢力への対抗上）
→驃国の唐への朝貢を仲介（国際関係中でのステータス上昇？）
唐の先進文化を積極的に吸収

6.2 唐・南詔国関係の変質

■9世紀前半の推移

徳宗+李泌—韋皋—（東蛮）—異牟尋+鄭回 ライン

805 徳宗崩御（正月）、韋皋死す（8月）（李泌は789にすでに死去）

同年 順宗退位して憲宗即位

※憲宗の元和年間（806～820）→藩鎮抑圧に一定程度の成果（「元和の中興」）

808 異牟尋死す・長男尋閣勸が継ぐ

南詔国の再帰唐を実現させた立役者が相次いで舞台を去る

809 尋閣勸死す・長男勸龍盛が継ぐ

816 勸龍盛を「淫逆不道」として王嵯巔がクーデタ発動、勸龍盛を殺し、弟勸利盛を立て実権掌握

■吐蕃王朝の衰退

ウイグル—唐—南詔の封鎖政策により吐蕃は国際的に孤立

ティソン・デツェン（742 - 797）：仏教の国教化 →9世紀には教団指導者が国政の頂点に立つ

→846 ダルマ王暗殺とともに国中が混乱、王位継承をめぐる王家は南北2朝に分裂、

国境の吐蕃軍も互いに争って潰える

■長慶の会盟（唐蕃会盟）

821-2（長慶元-2）唐—吐蕃間に会盟の成立

→前後数回にわたっておこなわれた唐蕃会盟の最後のもの

→唐朝が南詔国との同盟関係を重視せざるをえない状況がなくなる

年	月	(出典)	年	月	(出典)
開元	22(734)	3 (朝, 褒)	元和	12(817)	12 (朝)
天寶	7(748)	(朝)		13(818)	4 (会)
貞元	10(794)	4 (褒)		14(819)	1 (褒)
	11(795)	9 (朝, 褒)			11 (褒)
	12(796)	4 (朝, 褒, 会)			12 (褒)
	14(798)	12 (朝, 会)		15(820)	是年 (朝)
	18(802)	1 (朝)	長慶	3(823)	9 (朝)
		12 (朝)	寶曆	2(826)	1 (朝)
	19(803)	1 (褒, 褒, 会)		3(827)	(旧) (2月改元)
	20(804)	(旧)	太和	元(827)	11 (褒, 旧)
永貞	元(805)	11 (朝, 会)		2(828)	1 (褒)
元和	元(806)	8 (朝)			12 (褒)
	2(807)	8 (褒, 会, 旧)		3(829)	12 (朝) (11月成都攻撃)
		12 (朝, 会)		4(830)	12 (朝)
	3(808)	11 (会, 旧) (告異牟尋死)		5(831)	11 (朝)
	4(809)	1 (褒)		6(832)	1 (褒)
		12 (朝)		7(833)	1 (褒)
	7(812)	1 (褒)	開成	元(836)	12 (朝)
		10 (旧)		2(837)	1 (褒)
		12 (会)			12 (朝)
		是年 (朝)		3(838)	2 (褒)
	8(813)	12 (褒)		4(839)	1 (褒)
	10(815)	1 (褒)			閏1 (朝)
		11 (朝)		5(840)	(朝)
		12 (褒)			12 (褒)
	11(806)	1 (褒)	会昌	2(842)	1 (会)
		5 (褒, 旧) (報勸龍盛死)		6(846)	1 (朝, 褒)
		12 (朝)	大中	8(854)	2 (会)

南詔国から唐への朝貢 (林 1992 による)

出典 朝：『冊府元龜』朝貢四・五 (卷 971-972)
 会：『唐会要』南詔蛮 (卷 99)
 褒：『冊府元龜』褒異二・三 (卷 975-976)
 旧：『旧唐書』南蛮伝 (卷 147)

史料 6.1 『資治通鑑』卷二百三十六

永貞元年 (805) 8 月

癸丑, 西川節度使南康忠武王韋皋薨。皋在蜀二十一年, 重加賦斂, 豐貢獻以結主恩, 厚給賜以撫士卒, 士卒婚嫁死喪, 皆供其資費, 以是得久安其位而士卒樂為之用, 服南詔, 摧吐蕃。幕僚歲久官崇者則為刺史, 已復還幕府, 終不使還朝, 恐泄其所為故也。府庫既實, 時寬其民, 三年一復租賦, 蜀人服其智謀而恐其威, 至今畫像以為土神, 家家祀之。

史料 6.2 『資治通鑑』卷二百四十九 大中 13 年 (859) 12 月【條下】

初, 韋皋在西川, 開青溪道以通羣蠻, 使由蜀入貢。又選羣蠻子弟聚之成都, 教以書數, 欲以慰悅羈縻之, 業成則去, 復以他子弟繼之。如是五十年, 羣蠻子弟學於成都者殆以千數, 軍府頗厭於稟給。又, 蠻使入貢, 利於賜與, 所從僦人浸多, 杜悰為西川節度使, 奏請節減其數, 詔從之。南詔豐祐怒, 其賀冬使者留表付嵩州而還。又索習學子弟, 移牒不遜, 自是入貢不時, 頗擾邊境。

會宣宗崩, 遣中使告哀, 時南詔豐祐適卒, 子酋龍立, 怒曰:「我國亦有喪, 朝廷不弔祭。又詔書乃賜故王。」遂置使者於外館, 禮遇甚薄。使者還, 具以狀聞。上以酋龍不遣使來告喪, 又名近玄宗諱, 遂不行册禮。酋龍乃自稱皇帝, 國號大禮, 改元建極, 遣兵陷播州。

史料 6.3 『資治通鑑』卷二百三十六 貞元 18 年 (802) 正月

春正月, 驃王摩羅思那遣其子悉利移入貢。驃國在南詔西南六千八百里, 聞南詔內附而慕之, 因南詔入見, 仍獻其樂。

史料 6.4 『資治通鑑』卷二百三十九 元和十一年 (816) 二月

南詔勸龍晟淫虐不道, 上下怨疾, 弄棟節度王嵯巔弑之, 立其弟勸利。勸利德嵯巔, 賜姓蒙氏, 謂之「大容」。容, 蠻言兄也。

史料 6.5 『資治通鑑』卷二百四十一 元和 15 年 (820) 12 月

庚辰, 西川奏南詔二萬人入界, 請討吐蕃。

史料 6.6 『資治通鑑』卷二百四十二 長慶元年 (821) 9 月

吐蕃遣其禮部尚書論納羅來求盟。庚戌, 以大理卿劉元鼎為吐蕃會盟使。

(十月) 癸酉, 命宰相及大臣凡十七人與吐蕃論納羅盟于城西; 遣劉元鼎與納羅入吐蕃, 亦與其宰相以下盟。

史料 6.7 『旧唐書』卷一百六十七 段文昌伝

(長慶) 二年, 雲南入寇, 黔中觀察使崔元略上言, 朝廷憂之, 乃詔文昌禦備。文昌走一介之使以喻之, 蛮寇即退。

■豊祐と杜元穎の登場

823 勸利盛死す。弟の豊祐（勸豊祐）立つ「勇敢にして善く其の衆を用う」

823 中書侍郎・同平章事の杜元穎、西川節度使となる

※「中書侍郎・同平章事（同中書門下平章事）」＝唐後期の宰相の肩書

西川は章梏死後の混乱を経て順地化、

エリート官僚の出世コースに組み入れられる



■杜元穎治下の西川（成都府）

杜元穎：元宰相・文人／軍事には不案内

→軍費をピンはね

王嵯巔：四川侵攻を計画→太和3年（829）に西川に侵攻

6.3 南詔軍の成都侵攻（829）

11月 王嵯巔の率いる南詔軍、唐の領域に侵入

「蛮は蜀卒をもって郷導となす」＝困窮した辺境の兵が南詔軍を引き込んだ

12月 成都城内に侵入

「蛮成都の西郭に留まること十日、其の始めは蜀人を慰撫し、市肆安堵す。将に行かんとするに、乃ち大いに子女・百工数万人及び珍貨を掠して去る」

■成都侵攻の残したもの

王嵯巔と節度使郭釗の間に和約（相互不可侵）

・唐から南詔国（王嵯巔）に国信を賜う→雲南対策の重要性を再認識させることには成功

・王嵯巔の権勢ますます増大？（唐宋史料にはこの後登場しない）

830 郭釗にかわって李徳裕が西川節度使となる

・「籌辺楼」を作り、詳細な地図を作製／辺境に詳しい兵士から情報収集

→南詔国に対する徹底的な防衛体制を固める

■その後の唐－南詔国関係

これ以後も南詔→唐の朝貢は継続する→南詔国にとって唐朝との関係は不可欠

・円仁の記録：開成4年（839）正月の朝賀で南詔国の序列は（日本を抜いて）諸国の第1位

→唐朝にとっての成都の重要性（長安有事の際の朝廷の避難場所）も考慮すべき？

■南詔国の唐の領域以外への軍事遠征

832 驃国（ピュー）：ミャンマー中部：イラワジ川流域

835 彌諾国・彌臣国：ミャンマー西部：アラカン州・チンドウィン川流域

??? 女王国：ラオス??・陸真臘・水真臘：カンボジア

※いずれも南シナ海・ベンガル湾への出口／時期的には成都侵攻の直後

→この時期にあらためて東南アジア大陸部の陸上交易ルートを広域に把握しようとしている？

＝唐－吐蕃関係の終息に際して、そこに自らの新たな存在意義を見いだそうとしている？

史料 6.8 『資治通鑑』卷二百四十三 長慶三年（823）七月

南詔勸利卒，國人請立其弟豐祐。考異曰：實錄：「九月辛酉，南詔王立佺進其國信。」歲末又云：「南詔請立蒙勸利之弟豐祐。」云立佺者，蓋誤也。今從新傳。豐祐勇敢，善用其衆，始慕中國，不與父連名。

史料 6.9 『資治通鑑』卷二百四十三 長慶三年（823）十月

己丑，以中書侍郎、同平章事杜元穎同平章事、充西川節度使。

史料 6.10 『資治通鑑』卷二百四十四 太和 3 年（829）11 月

丙申，西川節度使杜元穎奏南詔入寇。元穎以舊相，文雅自高，不曉軍事，專努蓄積，減削士卒衣糧。西南戍邊之卒，衣食不足，皆入蠻境鈔盜以自給，蠻人反以衣食資之。由是蜀中虛實動靜，蠻皆知之。南詔自嵯巔謀大舉入寇，邊州屢以告，元穎不之信，嵯巔兵至，邊城一無備禦。蠻以蜀卒為鄉導，襲陷嶺、戎二州。甲辰，元穎遣兵與戰於邛州南，蜀兵大敗。蠻逐陷邛州。

史料 6.11 『資治通鑑』卷二百四十四 太和 3 年（829）12 月

己酉，以東川節度使郭釗為西川節度使，兼權東川節度事。

嵯巔自邛州引兵徑抵成都，庚戌，陷其外郭。杜元穎帥衆保牙城以拒之，欲遁者數四。壬子，貶元穎為邵州刺史。

.....

蠻留成都西郭十日，其始慰撫蜀人，市肆安堵。將行，乃大掠子女，百工數萬人及珍貨而去。蜀人恐懼，往往赴江，流尸塞江而下。嵯巔自為軍殿，及大渡水，嵯巔謂蜀人曰「此南吾境也。聽汝哭別鄉國。」衆皆慟哭，赴水死者以千計。自是南詔工巧埒於蜀中。

嵯巔遣使上表，稱：「蠻比脩職貢，豈敢犯邊，正以杜元穎不恤軍士，怨苦元穎，競為鄉導，祈我此行以誅虐帥。誅之不遂，無以慰蜀士之心，願陛下誅之。」丁卯，再貶元穎循州司馬。詔董重質及諸道兵皆引還。郭釗至成都，與南詔立約，不相侵擾。詔遣中使以國信賜嵯巔。

史料 6.12 『入唐求法巡禮行記』（日·円仁撰）

〔開成四年（839）二月〕二十七日。……円澄稱：「去月四日，從長安發歸。十三日，至填州甘堂驛。擬留楚州、更不向揚州。官人等從在京之日、沈病辛苦。然去月十三日，入內裏廿五人。錄事不得從。會集諸蕃惣五國；南（照）〔詔〕國第一位，日本國第二。自餘皆王子。不着冠，其形軀屈醜，着皮氈等。又留學生道俗惣不許留此間。圓載禪師獨有勅許，往留台州。自餘皆可歸本鄉。又請益法師不許往台州。左右盡謀，遂不被許。是以歎息者。」

史料 6.13 『蠻書』卷十 南蠻疆界接連諸蕃夷国名第十

彌諾國、彌臣國，皆邊海國也。呼其君長為壽。彌諾面白而長，彌臣面黑而短。性恭謹，每與人語，向前一步一拜。國無城郭。……在蠻永昌城西南六十日程。太和九年曾破其國。劫金銀，擄其族三二千人，配麗水淘金。

驃國，在蠻永昌城南七十五日程，閣羅鳳所通也。其國用銀錢。以青磚為圓城，周行一日程。百姓盡在城內。有十二門。當國王所居門前有一大象，露坐高百餘尺，白如霜雪。俗尚廉恥，人性和善少言，重佛法。城中並無宰殺。又多推步天文。……有移信使到蠻界河賧。則以江猪白氈及琉璃罌為貿易。與波斯及婆羅門鄰接。西去舍利城二十日程。

.....

女王國，去蠻界鎮南節度三十餘日程。其國去驩州一十日程，往往與驩州百姓交易。蠻賊曾將二萬人伐其國，被女王藥箭射之，十不存一。蠻賊迺回。

水真臘國、陸真臘國，與蠻鎮南相接。蠻賊曾領馬軍到海畔，見蒼波汹涌，悵然收軍卻回。